

新連載!!

病院のお仕事いろいろ

その1 知識と技術を高める人材を育成

集中ケア認定看護師 中野 あけみ(なかの あけみ) 看護師長

患者さんにとって、とくに入院した場合などは、最も身近な存在なのが看護師さんです。本院では専門的な知識と経験を持った各方面の認定看護師を養成していますが、その中でも救急蘇生や病状が急変したときの対応、人工呼吸管理など重い症状の患者さんが一日でも早く回復されるのを手助けするのが、「集中ケア認定看護師」です。

その教育責任者である中野あけみ看護師長はこう語ります。「ICU(集中治療室)など現場はとても多忙で厳しいですが、緊張感と連帯感が私は好きです。生命の危険があった患者さんが回復してくれたとき、大きなやりがいと喜びがあります」

多様化し、日進月歩の医療の世界にあって、看護分野もまた知識と技術を高め続けることが求められるのです。危機的状態にある患者さんは、分、秒単位で容態が変わります。教科書や机上の学問的な勉強はもちろんのこと、そのうえで「何かおかしい」といった第六感のような感覚を磨くことや、チームワークでの対応など総合力で課題に取り組むことが大切になります。

現場経験20余年の実績を踏まえて、管理職として若手の人材育成に取り組む中野師長は、「地道に、歩みを止めず、いくつになっても学び続けることの大切さを教えて行きたい」と、自分に言い聞かせるように言葉を続けます。

それと同時に、患者さんやそのご家族に対して、安心感を持ってもらえるように、丁寧できめ細かい精神面でのケアを大切にするという、看護の基本中の基本を大切にすることも決して忘れてはいないのです。



その2 「パリパリと音を立てて タクアンを噛みたい」を実現

医療技術職員 清水 裕次(しみず ゆうじ) 歯科技工士

歯医者さんと連携して義歯(入れ歯)などを作るのが歯科技工士さんの役目で、一人ひとりの患者さんに最適のものとなるよう工夫された、すべてオーダーメイドの作品です。

子どもの頃からモノづくりが好きで、プラモデルや簡易ラジオの製作をしていた清水さんが、医療系の仕事で自分に適していて「難しいが面白そうだ」と関心を持ったのが歯科技工士の世界でした。材質についての理工学的な分野と、一つひとつ手作り製作というもののづくりの匠の世界に、面白さとやりがいを見つけたことがきっかけです。

高齢化や病気で歯や口の機能に障害が出ると、噛む、飲み込む、話すといった動作に支障が出ます。食に関する障害は健康にも大きく影響しますし、会話に不自由したり、見た目を気にすることが生活の質を低下させる悪循環につながります。「ちゃんと噛めることの喜びはとても大きくて、若い頃のように音を立ててタクアンが食べられるようになったといった感激の声を聞くと、自分自身もとても嬉しい!」(清水さん)。

歯科医師と密接に連携をし、患者さんと直接面談しながら細かい要望を聞けるのも大学病院の歯科技工士ならではのこです。

「学生実習のとき高校生の女の子の前歯が欠けたのをきれいに治してあげたら、本人はもちろん親や歯科医師の先生もみんなとても喜んでくれました」と清水さん。患者さんの喜びを共有できることがこの仕事の醍



醐味といえるようです。職人的な匠の技はもちろんですが、インプラントやコンピュータによる設計などハイテク技術に通じていることも求められ、日々研鑽が求められるとても奥の深い分野でもあるのです。